

『新・おねーさんの耳はロボの耳』

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元としています。

この作品は『おねーさんの耳はロボの耳』の続編です。

セリオパワー、再び

山本がセリオの付帯機器をセッティングした後、来栖川老人とともに藤田家を後にした。何でも山本にしろ来栖川老人にしろ、「多忙を極める身」であるとのことだが、そんなことは浩之には関係ない。むしろ、邪魔者がいなくなってくれてせいせいすると言うくらいなのだ。

「パパさんには悪いけど…、あの人もやっぱり人の親してるからな…」

とまあ、そんな風につぶやきながら、浩之の考えることはやはりろくなことではなかったりするもので、そうでなかったら、山本を邪魔者扱いすることもないのだ。

気を取り直して、セリオの方を見てみると、髪の色は元の茶色に戻っていた。

「あれ？　なんだよセリオ、戻しちゃったのか？」

「一応これが基本色なんだから、これが一番楽なのよ」

浩之の反応に悪びれることもなくセリオが答えると、浩之はあからさまに残念そうな表

情をしてみせた。

「せっかくパパさんたちも帰ったんだから、これからもっと楽しもうと思ってただけだな……」

「言い忘れてたけど、色を変えるのって結構疲れるのよ」

なおここで言う「疲れる」と言うのは当然「バッテリーの消費が激しい」と言う意味であって、セリオたちメイドロボに「疲れる」と言う明確な感覚があるわけではない。

「そうか……。それじゃ、俺が遊び半分で作ってこれて言うのはよくないな」

「あら、珍しく優しいわね、浩之さん」

浩之の言葉にセリオが茶々を入れたが、そこにマルチも加わった。

「浩之さんはいつも優しいですよ、セリオおねーさん」

「おやま、マルチもすっかり浩之さんにてなづけられちゃってるわねえ」

「人聞きの悪いことを……」

セリオは冗談のつもりでそう言ったし、浩之もそう受け止めていた。だが、マルチはちよつと違っていた。

「そうですね。セリオおねーさんがいなかった時の浩之さんは……」

と真剣な表情で言い出したかと思ったら、やがて半泣き顔になってしまった。

「浩之さんはあ……うぐっ……ずっと……おね……」

恐らくは「浩之さんはずっとおねーさんのことを考えていたんです」とでも言いたいのだろうが、あいにく言葉が詰まってしまって、とてもそうは聞こえない。

「マルチ……ごめんなさい」

セリオはそう言いながら、マルチの肩にそっと手を乗せた。すると、それまで抑えていたものが一気に溢れたように、マルチは大声を上げて泣き出してしまった。セリオの胸に顔を埋めて。

(おいおい、マルチ羨ましいぞ)

このような感動的なシーンを目の当たりにしながらも、浩之はいつもの浩之だった。

しばらくしてマルチもようやく落ち着きを取り戻したらしく、涙の痕の残る顔で笑いがらセリオに、

「もう大丈夫です」

と告げる。それを見てセリオも納得したように、笑顔で答えていた。

「マルチの泣きっぷりは変わってないようで安心したわ」

「おねーさんも全然変わってないです」

と二人のやり取りを、すっかり忘れ去られた浩之はただ見守るだけだったが、いつまでもそうしてるわけにも行かない。

「ところでお二人さん、ぼちぼちいいかな？」

「浩之さん、なんででしょうか？」

「あら浩之さん、まだいたのね」

「うっ…」

予想通りと言うべきか、二人の決して暖かくはない反応にもめげずに、浩之は自己主張を続けることにした。

「…まあ、今日はセリオが戻ってきたためでたい日なんだからさ…」

「だから？」

「だ、だから、ごちそうなんか作ってくれないかな？なんて」

「誰に？」

「そ、そりゃ、食べるのは俺しかないけどさ……」

「誰のお祝いで、誰が作って、誰が食べるの？」

「う……セリオの戻ってきたお祝いで、セリオたちが作って、俺が食べる……だめ？」

まともに考えてみれば、どこがお祝いなのかよく分からない言い分である。しかし、浩之がセリオに何かをしてあげると言うのも考えにくい上に、特にできることもないのだ。

「ずいぶん浩之さんにとって都合のいいお祝いねえ……」

セリオの目が浩之を厳しく責め立てる……が、セリオはすぐに笑顔を見せて、

「なんてね。それは冗談として、いいわよ。せっかくだから新しいわたしの腕を見せてあげる」

と言った。ちなみに最後の「あげる」は、投げキッスをしながらである。それを見た時、

浩之はほんの少しだけいやな予感がした。

（セリオって昔からこんなだっけ？）

と、呆然としてる浩之をよそに、セリオはすぐに支度に取り掛かろうとしていた。

「さて、それじゃマルチも手伝ってね」

「はい！ わたし、一生懸命頑張ります」

こうして二人は台所の方へ消えて行った。

浩之は居間でぼんやりとしながら、台所のあちこちを調べているセリオと、その周りを

ちよこまかとしているマルチの後ろ姿を眺めていた。

（うゝむ、久しぶりにセリオのメンが食えるのか…。思えばここんところマルチの実験料理ばかりだったからなあ。ちよつと楽しみつてなもんだな）

マルチの実験料理と言うのは、別に嫌味でもなんでもなく、本当にそうなのだからしょうがない。料理の本などを見ながらやっても、どうしても本の通りには行かずに、あれこれと試行錯誤を繰り返す…そんな料理なのだ。

と、浩之がセリオの料理の妄想にふけっていると、セリオが台所から呼んでいた。

「浩之さん、ちよつといいかしら？」

「お？ なんだよ、セリオ」

答えながら浩之が台所に入ると、セリオはお湯の入ったお椀を差し出して、

「ちよつとこれの味を見てください？」

と告げた。訝しいとは思いつながら浩之がそれを一口飲んでみると、どうやらそれはお湯に塩を落としただけのものらしかった。ただ、ちよつと塩味が薄いように思える。

「ちよつと薄い…かな？」

すると、セリオはそのお椀を取って、お湯をすべてこぼしてしまい軽く水で洗った後に、またお湯を入れてそれに塩を少し入れた。

「これはどう？」

差し出されたお椀のお湯を一口飲む浩之。どうやらまだ薄いようだ。

「まだ薄いか？」

するとまたセリオはお湯をこぼして、洗って、お湯と塩を入れる。

「これは？」

今度は少し塩味が濃いように感じた浩之が「濃い」と告げると、また先ほどの動作を繰り返す。

そうして何度か試した後、ようやく浩之が「ちょうどいい」と答えた。

「そう、それじゃ浩之さんの塩加減はこれで決まりね」

浩之の返事を受けてセリオがそう言ったが、浩之には今一つ事情が飲み込めてない。

「なんで今更？」

「実はね、今の体はまだ微調整がすんでないのよ」

「微調整？」

「そ。山本さんも急ピッチで仕上げただけど、さすがに全部はやり切れてないってところね。それだから、わたしの方の感覚と過去のデータとに微妙なずれがあるのよ」

「なるほど、それで俺の塩加減を確認してたってわけだ」

「そーゆーこと。それじゃ、後はマルチと二人で支度をするから、浩之さんは好きにしていいわよ」

セリオの申し出にどこか邪魔者扱いされてるような気がした浩之は、そのままダイニングの椅子に腰を下ろした。

「いや、どうせすることもないから、ここで待ってるよ」

「ヒマなのは相変わらずなのね」

セリオが苦笑気味にそう答えたが、浩之はそれになにも答えずにただ二人を眺めることに専念した。

てきばきと作業をこなすセリオと、ちまちまと周りで手伝ってるんだか邪魔してるんだかよく分からないマルチ。二人が奏でる台所の音楽に耳を傾けながら、浩之は二人を見つめつけていた。

(こうして二人がやってるのを見るのはホントに久しぶりだな)

ここしばらくは見るのできなかった情景。それが今は現実のものとして浩之の前にある確かな感触。そんなものにどこか郷愁めいたものすら感じてしまう。と同時に、浩之の興味は別の点にも注がれて行った。

(そう言えば、セリオの体って全部新しくなったんだよな…)

そんなことを思い出しながら、浩之の視線はセリオに集中して行く。

背中、長い髪の毛の下側から頭の方と上がってから、また背中に。そして腰から足の方を。

別段いやらしい目つきで見てたわけでもないし、その時は特別何かを考えていたわけでもない。そのせいか、セリオもマルチも浩之の行動には特に反応を示さなかった。

(ふゝむ…。ただ見てるだけってのも結構退屈だなあ…)

とか思いながら、浩之の視線は徐々に動きがなくなっていく。そして、最後に止まったのは…時折セリオが横を向いた時に伺える膨らみ、つまり胸の部分だった。

(いくつぐらいなんだろ…。もらった説明書に書いてあったっけか?)

知らず知らずのうちに浩之の目つきが変わっていく。

(そんなに大きくはないけど小さくもない…そんな感じか? まあ、確かに前の体の時はそれなりのボリュームがあったもんな)

浩之がもはやスケベ心丸出しで見ているにも関わらず、セリオたちの方には変化が見られない。いつもなら、ここいらでセリオのツツコミがあってもいくらいなのだが。

(…どうやら、セリオさんは気にしてないみたいなので……)

と、その時。浩之は実に不逞なくらみを思い付いた。

賢明な読者にはすでにお分かりだろうが、恐らくそれはこのシリーズでは欠かせないことに違いないのだ。

(そうそう、それはお約束つてなもんでしょ)

マルチが離れた時を見計らって、浩之はそっとセリオに近づいて行った。

(うーん、セリオも珍しく無防備……。これはOKのサインかも?)

ちょっと冷静になって考えてみれば、いくら何でもセリオが浩之の企みや、その不審な行動に気づかないはずがない。もし、何もしないとしたら、それは明らかに何か意図があるに決まってるのだ。

しかしながら、その時の浩之にはそんなことを考える余裕はなかった。ただ一つ、セリオの胸の感触だけに期待していたのだ。

(目標ロックオン……。そんじゃ一気に……)

浩之に背中を向けたままのセリオまでの距離は、もうほとんどない。いくら何でも、この状態ではセリオにはバレバレのはずだ。

だが、青春の暴走はとどまるところを知らなかった。

「セリオオーっ！」

何故か浩之は大声を上げながら、後ろから両手をセリオの胸に回した。

マンガなら“ガシツ”とか擬音が大きく描かれるくらいに、大袈裟な動作の末に浩之はその本懐を遂げることが出来た。

(うっ…、こ、これは以前に増して絶妙な触感と弾力が…)

ここまでくれば単なる胸フェチに過ぎないような気もするが、その時、浩之はこの上な征服感を感じていたのは確かだった。

しかし、浩之がその至上の幸福を味わったのはほんの一瞬だった。

「きゃあああああああっ！」

凄まじい嬌声とともに、セリオの体が凄まじい速さで向きを変えながら、その右手を振り上げる。

そして。

“バシツ”とか“バチン”とか、そんな生易しい表現が出来ないくらいの轟音が響いた後。

浩之は風になった。

後に「体が浮いた感じがしたかと思ったら、一瞬にしてすべてが真っ暗になり何も考えられなくなった」と語るように、浩之の体は台所を飛んでいたのだ。そして、そのまま食器棚と激しく衝突したのである…そして、暗転…。

…しばらくして、浩之は意識を取り戻した。

(ううっ…俺は一体何を…)

激しい痛みをあちこちに感じながら浩之の目を開けると、そこにはセリオの胸、いや上半身が。

そして、上の方からセリオの声と、横の方からマルチの声。

「やっと目を覚ましたわね、浩之さん」

「浩之さん、大丈夫ですかあ？」

（…こりや一体？）

何がどうなってるのかすぐには分からなかったが、どうやら浩之はセリオの膝枕に頭を乗せている恰好になっていて、仰向けになってる浩之の右側にマルチがいるらしい。

「セリオ…、それにマルチ、俺は一体…って、てててて…」

一体どうしたんだ、と言うつもりだったが、途中でそれはまともな言葉にならなくなっ
た。

「痛いですか？」

マルチが心配そうに声を掛けた。と同時に、冷たい布を浩之の顔の方に当ててくれる。

「マ、マルチ、さんきゅ…って、いててて」

一旦痛みを感じ出すと、それは一気に浩之の体中を支配してしまったように痛みが増して行く。

「しばらくは痛みが取れないと思うけど、これもしようがないわね」

「な…セリオ、今のは一体？」

痛みを堪えて浩之が聞くと、セリオは苦笑しながらそれに答える。

「痴漢撃退システムって言うのよ」

「なに？」

「正確には緊急回避システムの回避レベル2ってところなんだけど、ようするに、さっき

みたいな状況で取りうる反射的行動の一つなのよ」

「……おいおい、何だよそりゃ……」

「だから、微調整がすんでないって言ったじゃないの。……でも、山本さんはこうなることを見越して、『細かい部分は現地調整できるだろうから』って言ってたのよね」

「っこりと笑うセリオとは対照的に引きつった笑顔を見せる浩之。

「じよ、ジョーダンじゃねーよ、パパさん……」

そして、全然関係ないところに感心するマルチ。

「それにしてもセリオおねーさん強いですー」

「ありがと、マルチ。でも、さっきのは力の制御が完全に効いてない状態、つまりこれ以上ないってくらいフルパワーなのよ。それを食らってこれだけのダメージって、さすがに浩之さんよねえ」

「浩之さんも凄いですねー」

セリオの言葉に相づちを打つように、先ほどよりもさらに感心してる様子のマルチだったが、浩之はそれに対して困惑した表情を見せるだけだ。

「全然嬉しくないぞ……」

「まあまあ。あと二、三回やってくれば、適正な力の設定が出来るから浩之さんも協力してちょーだいね」

「……二、三回って言うけどな、何で俺がそんなことしなきゃいけないんだ……」

「大丈夫よ、次はフルパワーなんて出さないから」

「フ、フルパワーってあんた……」

そして、ついには三人揃って笑い出してしまふ。

何が可笑しいのか：なんてことは誰にもよく分かってないだろうが、それでも笑わずにはいられない。

「ははははははははっ」

「やーねー、浩之さんも何を笑ってるのよお」

「何だか知りませんが、楽しいですな」

と、こんな具合にしばらくの間、藤田家の居間は明るい笑いが絶えることはなかった。そして、それは恐らくこれからも絶えることはないだろう。

いつまでも。

浩之とセリオとマルチがいる限り……。

彼らの未来に幸あらんことを。

（つて、おい、これで終わりか？）

おっと、そうそう、落ちを忘れてたので、それについて……。

しばらくの歓談と安静の後、浩之がどうにかして動けるようになったが、彼がその日の夜に食べたごちそうはどうなったかと言おうと。

「はい、浩之さん。いくらでもどうぞ」

「あの一セリオさん、これは？」

「今夜の食事よ」

と言うものの、浩之の目の前にはカップラーメンが一個置かれているだけなのだ。

（ごちそう…って言ったはずなのに、セリオの冗談なのかな？ …いや、もしかすると、ふたを開けると中に特製のラーメンが入ってるのか？ セリオだったらやりかねない趣向だな。うん、きつとそうなんだ！）

浩之が勝手に解釈して、その目の前にあるカップラーメンのふたを開けてみたが…中身は期待に反して至って普通の物だった。

「あれ？」

「何か気になることでも？」

「いや、これは普通のラーメン？」

「そうよ」

「これに何かセリオが手を加えてるとか、ないの？」

「ないわよ。買い置きしてあったらしいカップラーメンにお湯を注いで、三分置いただけ」

「って、ことは、本当に普通のカップラーメン？」

「そうよ…ってさっきから言ってるじゃないの」

期待を裏切られた浩之が反論をしようと思った瞬間、先にセリオがそれを封じてしまった。

「だって、台所の状態がアレじゃあ、何も作れるわけじゃないでしょう？」

セリオが言いながら指差したのは、浩之が体ごと激突して完全に粉砕された食器棚と、

激しく散らばった食器の残骸と、その影響でひどく散らかっている台所だった。

「う……………」

確かに食器棚に激突したのは浩之自身だが、その浩之を飛ばしたのはセリオである。そう思って反論をしようとしたが、すぐに思いとどまった。何故ならセリオに飛ばされる原因を作ったのは、他ならぬ浩之自身だから。

「食器がみんな使い物にならないし…」

「うう……………」

「片付けるのも一苦労よね」

「ううう……………、カップラーメンおいしそうです」

「そう、よかった。お湯だけはまだあるから、おかわりも出来るわよ」

「うううう……………」

こうして、浩之は一生の中で一番忘れ得ないカップラーメンの味を堪能したのだった。よかったね…と言うことで、まずはめでたしめでたし。

『新・おねーさんの耳はロボの耳』セリオパワー、再び

初版 1998/04/22

DIYしましょ！

台所をマルチとセリオ、そして浩之の三人で片付けたのはいいが、彼ら…特に浩之には切実な問題が残された。

「食器がないわねえ…」

「そうですね…。壊れたお皿やお椀を、元に戻すことは出来ませんし、どうしましょうか、浩之さん」

そう。食器棚を粉砕した、すなわち中にあった食器も見事に全壊していたのだ。使えるものは箸やナイフ、フォーク、スプーンと言った小物だけで、それ以外はまるで申し合わせたように砕け散っていたりするのだ。

「いやあ、ここまで見事に壊れるとはね…、我ながらよく無事ですんだと思うよ、本当にさ」

「ここまでやれば、それも一つの才能かも知れないわね、浩之さん」

「才能ですか、凄いですねー」

「そんな才能あっても嬉しくないし、だいたいどんな才能なんだよ…」

ため息を一つつきながら、何もなくなつた台所で途方に暮れてしまう浩之だった。

「でも、本当にどうにかしないとまずいな…。親父たちにはべれたら、また借金を負わされるかも知れないし、それよりも俺のメシがどうにもならないしな」

また借金と言うのは、取りも直さずマルチのことである。浩之はマルチを購入する際に、親父に（出世払いではあるものの）相当借りてるので、これ以上自分の懐を寂しくしたく

はないのが浩之の本音だ。

「どうにかするって言っても、新しく揃えるしかないでしょ？」

「うーん、それはそうだけどさ、そんな金はないって…。そうだ！ HM研究所かあのじいさんに出してもらうってのは？ 一応関係あるんだしさ」

「とっさに浮かんだアイディアだったが、そんなことまで責任を負わされる方にしてみれば、それはいいがかりのようなものである。

「残念ながら、わたしのやったことに関して責任を負うのは、所有者である浩之さんあなたなのよ」

「え……」

「契約上もわたしの所有者は浩之さんになってるの。だから、わたしのことで発生した賠償責任はあなたにあるのよ」

「それはつまり……」

浩之が言葉を詰まらせていると、セリオはウインクしながら言った。

「そう、わたしはあなたのものなのよ」

「そーかそーか、それはすごい……じゃなくて！」

「なあに？ 浩之さんは嬉しくないの？」

「いや…そう言う次元じゃなくてだな……」

「あなたのもなんだから、何でもしたい放題なのに」

「…い、いや、…さっきから言ってるよーにだなあ……」

「分かってるわよ、弁償の話でしょ？」

『新・おねーさんの耳はロボの耳』

「あうっ」

「話が変な方向に行く前に言っておくけど、とにかくこの台所の状態の関しての賠償義務は浩之さん以外にはないのよ」

「……セリオの意地悪う」

「何すねてるのよ？」

「いーもん、俺にはマルチもいるし」

「それは結構だけど、どうするの？」

「そうですね、浩之さん。台所がこのままだと、せつかくのセリオおねーさんの料理の腕がふるえないですよー」

ここで「自分の料理の腕がふるえない」とは言わない辺りがいかにもマルチらしい。

「うー……むっ……そうは言っても、金はあまりないし、どこかで余ってる食器をもらうのも恥ずかしいしな……」

「食器棚も直さないといけませんね」

「うー……むっ……セリオ、どうにかならない？」

「作りましょうか？」

「え？ 何を？」

「食器棚よ」

「えーっ？」

「面白そうですねー、やりましょう、浩之さん！」

「うっ、マルチも賛成なのか……」

「二対一ね」

「…いつもこのパターンで収められてるような気がするんだけどな……」

「しようがないわね」

「そーなのか？」

「これじゃどっちが主役がわかんねーな……」

読者の方々はご存じと思うが、この作品の主役はタイトルを見てくれれば一目瞭然、浩之ではなくて最新型メイドロボのセリオである。

「まあまあ、どっちでもいいじゃないの。楽しければそれで、ね？」

「……ま、いいか」

と言うわけで、浩之たちは食器棚作りに挑戦することになったのだが、浩之にとってもそんな日曜大工を趣味としてるわけでもないのに、それがうまくいくとは思えなかった。

ただ、それでも金がかからない方法であればやってみる価値はある、そう思っていただけなのだ。

しかし、それは実際に作業に入ってみれば杞憂に過ぎなかった。と言うのも、セリオの能力をあまり考慮していなかったのだ。

「さてと、それじゃ図面から引きましようか？」

そう言ってセリオは自分の制御端末であつと言う間に作図をすませて、それをHM研究所に電送して、研究所の大きなプリンタで印刷したものを持ってきたかと思うと、それに合わせて材料表を書き出したのである。

「それじゃ浩之さん、これだけの材料を揃えていただけるかしら？」

「セリオ：お前そんな才能もあつたのか？」

「サテライトサービスに決まってるでしょ。トレーサーとかデザイナーの技能くらいは十分カバー出来るのよ。実際にデザインを考えるのは難しいけど、何かを元にして、それを図面に直すことくらいは簡単なの」

「セリオおねーさん、すごいですー」

果たして何回目の同じセリフだろうか。マルチがセリオの能力に驚嘆するのも、もはや日常茶飯事と言う感じだ。

「いや、ホントにすごいな、こりゃ」

今回はマルチだけでなく浩之も驚嘆の色を隠せない。しかし、セリオはそれに対して、特に目立った反応は示さなかった。

「さっきも言ったけど、わたしのやってるのはただの真似しんぼであって、わたしなりの何かを創造すると言うレベルには達してないの。こんなの、全然すぐくも何ともないわ」

何かを新たに作り出すこと。芸術的センスと言ってもいいが、セリオやマルチがそれらを理解しないわけではない（夕焼けが綺麗と感じたりすることはある）が、何もないところから自分なりの何かを創造することは不得手としていた。

マルチの創作料理（ミートせんべいなど）は決してそれを作ろうと思っていたのではないので、何かを「作った」のではなく、自分の予想していたのとは違った物が「出来てしまった」に過ぎないのだ。これがメイドロボの一つの限界でもある。

さてさて、そんなこともかく浩之たちの食器棚の方の作業はどんどん進んで行く。

セリオに指示された通りの材料を準備して、いざ作業に取りかかろうと言うところまで

になった時、浩之がおもむろに言った。

「ところで、食器は？」

「そーね、そっちはわたしの方で検索してみるわ。掘り出し品があるかも知れないし」

セリオの言う検索とは、もちろんサテライトサービスを駆使した検索である。従って、浩之もあっさりとそれに任せておくことにした。

「そっか、そんじゃ頼むよ」

この後には実際に食器棚の製作に入るわけだが、何せこの三人のうち、まともに作業をこなせるのはセリオ一人と言っても過言ではない。なので、かいつまんでその状況を描くと…。

「浩之さんはこの板を図面通りに切ってくれるかしら？」

「セリオは？」

「わたしはガラスの方をやるわ。浩之さんが手を切ると行けないから」

「あの一、わたしは何をすればいいんでしょうか？」

「マルチは浩之さんの手伝いをしてあげてちょうだいね」

「分かりました！」

「それじゃ頑張らましょ！」

「おう！ まかせとけ！」

…そして、

「浩之さん、曲がってるような気がしますけど？」

「そ、そうか？」

『新・おねーさんの耳はロボの耳』

……とか、

「あ、マルチ、そんなところに手を置くなあ！」

「すみません」

……などなど、

「マルチ、板の端を磨いてくれ」

「はい」

「…誰がブラシで磨いてくれと…」

「違うんですか？」

………こんな風に、

「一向にはかどらないわね…」

「すみません…」

「俺だって専門家じゃないしな」

「しょうがないわね…。それじゃ、サテライトサービス全開で行くしかないわね」

「何だよ、そりゃ？」

「料理のレシピだけじゃないのよ」

「…別にそれだけとは思ってないけどさ」

「それじゃ、行くわよ！」

………こうなって、

「うわあ…」

「セリオおねーさん、すごいですー」

「ホント、すごえよ」

「ブツクサ言っでないで、この板を押えてちょうだい！」

「はいはい」

「……………つまりはこうだったのである。」

「はい、完成！」

「何だかんだ言いながら、結局はセリオ一人でやっちまったな」

「そんなことないわ。浩之さんとマルチの二人が手伝ってくれなきゃ、いくらサテライトサービスで大工の技能を得ても、これだけのものは作れないもの」

「そ、そうか？」

「ありがとね、マルチ、浩之さん」

「わたしもお手伝いできて嬉しいです」

「い、いや、そんなこと気にするな。ところで、食器の方は？」

「ああ、当たりがあつたから、明日にでも行ってみるわ。予算はそうね、浩之さんの生活費から十分出せる範囲ね」

「そうか！ それじゃ金を渡すよ……って、俺も行った方がいいのか？」

「いいえ、何も一気に全部揃えるわけじゃないし、浩之さんは大学もあるからわたしだけで行ってくるわ」

「そうか…、まあ、無理はするなよ」

「ありがと」

「わたしもお手伝いしますよ」

「そうね。マルチにもお願いしようかしら」

「はい、頑張ります！」

こうして、浩之は無事食器棚と食器を手に入れることが叶った。

そして、食器が揃った日の食事の時。

その日はセリオも気合いを入れて料理をしてくれていたらしく、食事どきに近づくにつれ、台所からはいい匂いが漂ってきて、浩之の期待を大いに膨らませていた。

「浩之さん、もうちょっと待っててね」

「あとは盛りつけるだけですからー」

セリオとマルチの二人に気を持たされながら、浩之は二人が「いい」と言うのを居間で待っていた。

そして、ようやくセリオが

「浩之さん、さあどうぞ」

と言うとすぐに浩之は台所へと入っていった。

そして、そこで見た物は。

食卓の上に並べられたセリオご自慢の料理の数々：には違いなかった。先ほどから漂ってくる食欲を刺激する匂いも、間違いないこれらの料理から発せられていた。

だが。

「…なに、コレ？」

浩之が口にした言葉はそれだけだった。

「何って、季節の野菜のあっさり煮物よ」

浩之が指さした器に盛ってあった料理をセリオが説明したが、浩之の様子は変化がない。「ソーじゃなくて……この器のこと」

浩之が指さしたその器は、およそ内容物とは縁遠い思い切り派手な彩色で、これまた艶やかに龍や虎の絵が描かれている代物だった。

おまけにそれは「季節の野菜のあっさり煮物」だけでなく、他の器も総じて派手な彩色をされている。さらによく見るとすべてに「蓬萊亭」と店の名前が入っていた。

「つぶれた中華料理店の処分品よ。見た目は派手だけど、物はすごくいいのよ」

「…なるほど」

処分品なれば安値で入手できる…その理屈は理解できた浩之だったが、その時はただこわばった笑みを浮かべているだけだった。

「はははははは……」

セリオの作ってくれた料理は確かにこの上なくおいしいものだった。だが、浩之はその夜に、龍が片手に水晶玉ではなくて煮物の入った小鉢を持って、空を飛び回る夢にうなされたと言う。

(お断り) 本作品に登場する店名「蓬萊亭」は架空のものであって、実在するものとは一切関係ありません。

『新・おねーさんの耳はロボの耳』

『新・おねーさんの耳はロボの耳』DIYしましょ！

初版:1998/08/19

PDF書式変更:2016/05/11

a s h